

第6号では、『反日種族主義』について特集で取り上げた。同書は韓国で12万部、日本で40万部以上、出版されたという。その内容は、私たちがこの間、日本から世界に発信してきたこととかなり重なっている。韓国ではいまだに情緒的な反日が社会を支配している中、勇気ある学者らが研究書でなく読みやすい啓蒙書を出したことの意味は大きい。だからこそ、日本の研究者のなかで、それぞれの分野の専門家をお願いして学問的な立場から同書を批評してみた。今後も、李栄薫教授らと学問的対話を続けていきたい。

また、日韓の対話ということでは、歴認研は昨年10月、日韓国際シンポジウム「韓国『徴用工』問題の真実」を福岡、大阪、東京で連続して行った。韓国からは弁護士で「慰安婦像と戦時労働者像設置に反対する会」共同代表の金基洙氏に来ていただいた。その記録も本号に掲載できた。多くの方に読んでほしい。

大阪でのシンポジウムの後の懇親会で、日弁連人権委員会元副委員長の岡島実弁護士が金弁護士と真摯に議論を交わして、戦時労働者に関する大法院判決のおかしさで意気投合された。そのときの話し合いをもとに、両弁護士が尽力されて12月23日に「1965年日韓請求権協定の尊重を求める日韓法律家共同声明」を出すことができた。本号ではその全文と、日韓同時記者会見の発言要旨を掲載した。これも貴重な記録だ。

一部では、韓国は儒教的価値観によって反日が体質化しているので韓国との付き合いを控えるべきだ、という主張がある。しかし、この主張は二つの事実を見落としている。第一に、韓国の反日の大部分は日本の中の反日日本人が火をつけたものだという事実だ。第二に、韓国にも嘘の反日を認めずそれを乗り越えて日本との友好を求め

て戦っている良識的勢力が存在する。

ソウルの日本大使館前で彼らは、昨年12月初めから毎週水曜日昼、嘘の反日の象徴である慰安婦像撤去を求める集会を開き続けている。ここにこそ、日韓友好の揺るぎない礎石がある。(西岡)

「正定事件研究」を本号に寄稿していただいた峯崎恭輔氏は、『「正定事件」の検証—カトリック宣教師殺害の真実』(並木書房、2017)という本格的な研究書を既に公刊されている。正定事件とは昭和12年10月、中国の正定でカトリック宣教師9人が、何者かによって殺害された事件である。

ところが今、“被害者たちは日本軍による200名の慰安婦差出し要求を拒否して、殺害された”という事実無根の物語が捏造され、被害者を「福者」として顕彰する運動が、中国政府の後押しによって水面下で進行しているのだという。バチカンのローマ法王庁がこれを認めれば、ユネスコ「世界遺産」に指定された南京事件の正に“二の舞”になってしまう。

峯崎氏は未だ若い研究者だが、フランス語の原史料を駆使して、日本軍殺害説の成り立たないことを実証的に解明している。氏の今後の活躍に、期待するところ大である。(勝岡)

歴史認識問題研究

(年2回発行)

第6号 (令和2年春夏号)

発行日：2020年3月19日

発行人：西岡 力

編集人：勝岡 寛次

編集部：歴史認識問題研究会

頒 価：1,000円

発行所：〒277-0065 柏市光ヶ丘2丁目1番1号

公益財団法人モラロジー研究所

西岡 力 研究室

T e l : 04-7173-3197

F a x : 04-7173-3199

印刷所：株式会社 長正社